

山岳部長就任のご挨拶

山岳部長 加藤彰彦



歓迎会で挨拶される加藤先生

この4月に飯田年穂先生から体育会山岳部長の任を受け継ぎました。創部100周年を挟む十数年間という節目の時期を担当することになり、その責任に身が引き締まる思いです。私自身、山登りは高校・大学時代には集中的に、卒業後もオールラウンドな山行を細く長く続けてきましたので、何かしらの貢献ができるよう、監督・コーチをはじめ炬燵会

の皆様と力を合わせて、次の100年に向けて取り組んでいきたいと考えております。

私が山登りを始めるきっかけは、中学3年のときに植村直己さんの『青春を山に賭けて』『極北に駆ける』『北極圏一万二千キロ』を読んだことです。受験勉強をしながら、高校生になったらぜひ山岳部に入りたいと思っていましたが、幸い入学した都立西高には本格的なクラブがあり、山三昧の高校生活となりました。活動は年3回の1週間合宿を柱に、月例山行と個人山行から成ります。合宿では、7月の夏期（北ア・朝日岳～爺ヶ岳、燕岳～槍ヶ岳～雲ノ平～薬師岳）と、3月の春期（北ア・鍋冠山～大滝山～蝶ヶ岳～上高地、南ア・上河内岳～光岳）が縦走、12月の冬期はスキー場の場外で幕営生活をしながらスキーと雪訓（戸隠スキー場と飯縄山など）を行いました。

一方、月例山行は、4月奥多摩での新歓、5月奥秩父、6月丹沢でのポッカ山行、9月沢登り（笛吹川東沢、米子沢など）、10月奥秩父、1月・2月は上信越や八ヶ岳（白毛門、日光白根山、天狗岳など）での冬山登山でした。高校生としてはハイレベルな内容と思いますが、毎回2人のOB（主に大学生・大学院生）が参加してバックアップしてくれました。これに高校生のみの個人山行として、5月に雪訓、8月と11月に南アの縦走や春山偵察を行い、高校1～2年の間に90日は山



歴代の部長先生

に出かけました（3年次は受験のため準OBとして参加）。

山行のスタイルは、文字どおり「昭和の山登り」で、無雪期は帆布製家型テント、積雪期はウィンパー型テントに泊まり、丸ごとの人参・じゃがいも・タマネギに塩漬け肉（冬・春はペミカン）、生米を持ち込んでストーブで調理し、昼はビスケットやカステラに各種レーション。荷物はすべてキスリングに詰め込んで、合宿初日の重さは夏で35kg、冬・春は40kgに達しました。

今回、山岳部長に就任して感銘を受けたのが、MACでは今なおこうした「昭和のスタイル」が維持されていることです。さすがにキスリングはなくなり、テントはドーム型になりましたが、登山やサバイバルの基礎となる活動（天気図作成も含め）を、便利さに流されることなく学生時代に経験しておくことは、その後の人生の大きな糧になると思います。

懐かしくなっていて、つい思い出話が長くなりましたが、山岳部長として私が貢献できることは、やはり教育面でありましょう。これまでMACは、日本のアルピニズム、あるいは広く山の文化を担う人材を輩出してきました。今後はこうした人材の育成をより積極的に前面に打ち出すことで、体育会山岳部の存在意義を学内外に示せれば、と考えております。そのためには、スポーツ入試の学生に

加えて、一般入試の学生たちを継続的にリクルートすることが課題になりますが、彼らに山岳部活動の意義を伝える際に、私の経験が役立てば、と思っています。

山の方は、最近では体力が落ちトレッキングがメインになっていたところ、昨年、運悪く手術を受ける羽目に陥りまして、現在はリハビリ中です。山の中での直接的な教育が難しくなり残念ですが、強力な監督・コーチ陣がいらっしゃいますので、私の方は、学生たちが卒業後も山を続けられるような進路を考えたり、山での経験を活かせる進路を選択したりできるようサポートしていきたいと考えています。ともあれ、まずは皆様がなさってきたこと、今の学生が行っていることを勉強することから始めます。長いお付き合いになるかと存じますが、どうぞよろしく願いいたします。

*

このたび、第15代目の山岳部長に就任された加藤彰彦先生のプロフィールを寄せていただきましたのでご紹介します。

《プロフィール》

出身地：東京都練馬区

生年月日：1964（昭和39）年6月4日

出身大学：早稲田大学・大学院

現職：明治大学政治経済学部教授

山登りとの出会い：中学3年生のときに『青春を山に賭けて』をはじめとする植村直己さ

んの著書を読んで感動したのがきっかけです。まずはどこかの山に登ってみようと思い立ち、いろいろ調べて奥多摩の川苔山に独りで出かけたのが最初の山登りになります。そこで出会った「百尋ノ滝」は、子ども心に強く印象に残りました。「就任のご挨拶」に書いたように、高校に入って本格的な登山を始めました。ちなみに、植村さんの本とともに新田次郎の小説もほとんど中・高生の間に読破しています。

植村さんには、山以外の点でも大きな影響を受けまして、大学時代にバックパッカーとして延べ1年間、アメリカ、カナダ、メキシコ、ヨーロッパ、インド、ネパール、タイなどを一人旅して巡りました。大学卒業後は銀行に3年間勤めて国際金融市場を経験しましたが、安定した地位を捨てて学者の道にチャレンジしたときも、当時は人生の冒険に船出する思いでした。

新しく山岳部長に就任された加藤彰彦先生は、植村直己会員から様々な影響を受けられたようです。先生は山岳部監督の中澤暢美会員の1つ年下で年齢的にも近いので、二人のタッグで山岳部を牽引していただけるよう、ご指導よろしくお願ひ申し上げます。